

原変比較表

舗装設計施工要領（高架・トンネル編）平成 20 年 7 月

対象項目	現行要領	改訂案	備考
<p>第 3 章 舗装材料と配合 3.4.2 混合物の室内配合</p>	<p>3.4.2 混合物の室内配合</p> <p>(1) 室内配合に用いる材料は、実際に舗設する材料を用いて行う。 (2) アスファルト混合物の配合設計は、施工性、耐久性、水密性、排水機能などを考慮して行う。 (3) コンクリートの配合は、「土木工事共通仕様書 第7 章コンクリート構造物工」によるものとする。</p> <p>【解説】 (1) 室内配合の試験には現場に用いる材料を用いる。 (2) アスファルト混合物の配合設計について規定した。 1) 表層に使用するポーラスアスファルト混合物の配合設計は、以下の手順で行う。 i) 配合設計は図-解3.6 の手順で行う。) 首都高速においては、空隙つぶれによる透水性能の低下やわだち掘れの発生が懸念されるため、最適アスファルト量の設定においては、耐劣化性、耐水性および骨材の飛散抵抗性等を特に考慮する必要がある。したがって、「舗装施工便覧(平成18 年版)」とは異なり、最適アスファルト量は、ポーラスアスファルト混合物が高温時の静的条件で保持しうる最大アスファルト量と、ポーラスアスファルト混合物を安定に保持しうる最小アスファルト量の中間とする。前者は、ダレ試験におけるアスファルト量とダレ量の関係が変曲点を示すアスファルト量であり、後者は、カンタブロ試験におけるアスファルト量と損失率の関係が示すアスファルト量である。) 最適アスファルト量を設定した後、混合物の物性試験を実施する。その結果、基準値を満足する場合は、このアスファルト量を設計アスファルト量とする。これらの基準値を満足しない場合は、材料の選定からやり直す必要がある。 2) 料金所付近の表層に使用する開粒度アスファルト混合物の配合設計 i) 開粒度アスファルト混合物は、骨材が粗いため、荷重支持機構はアスファルト粘着力よりむしろ骨材のかみ合わせに依存する面が強い。このような混合物ではマーシャル安定度試験により最適アスファルト量を選定することは好ましくないとされていたため、室内配合はこれまで実績等により決定していたが、「舗装施工便覧(平成18 年度版)」に規定されている方法によってもよい。) 開粒度アスファルト混合物は、マーシャル試験により、空隙率等を確認する必要がある。なお、アスファルト量が多いと施工時に分離を起こしたり、下部にアスファルトが溜まるなどの現象が生じたりすることがあり、浸透用セメントミルクが十分に浸透しないことがあるので、アスファルト量の設定に際しては十分検討する必要がある。</p>	<p>3.4.2 混合物の室内配合</p> <p>(1) 室内配合に用いる材料は、実際に舗設する材料を用いて行う。 (2) アスファルト混合物の配合設計は、施工性、耐久性、水密性、排水機能などを考慮して行う。 (3) コンクリートの配合は「土木材料共通仕様書 第7 章コンクリート構造物工」によるものとする。</p> <p>【解説】 (1) 室内配合試験には現場に用いる材料を用いる。 (2) アスファルト混合物の配合設計について規定した。 1) 表層に使用するアスファルト混合物の配合設計は、以下の手順で行う。 i) 配合設計は図 - 解 3.6 の手順で行う。 ii) <u>首都高速道路においては、空隙つぶれによる透水性能の低下やわだち掘れの発生が懸念されることから、最適アスファルト量の設定は、ダレ試験とカンタブロ試験により決定していたが、近年骨材、ポリマー改質アスファルトが改善されていることから、最適アスファルト量の設定は舗装施工便覧(平成18 年版)に準拠することとし、混合物のダレ試験より求めた最大アスファルト量とすることとする。ただし、当該アスファルト量の供試体作成時に、アスファルトのしみだしが観察され、アスファルト量を減らす必要が生じた場合に限り、カンタブロ試験を行い、ダレ試験で求めた最大アスファルト量と、カンタブロ試験から求めた最小アスファルト量の中から、最適アスファルト量を設定することができることとする。</u> iii) 最適アスファルト量を設定した後、混合物の物性試験を実施する。その結果、基準値を満足する場合は、このアスファルト量を設計アスファルト量とする。これらの基準値を満足しない場合は、材料の選定からやり直す必要がある。 2) 料金所付近の表層に使用する開粒度アスファルト混合物の配合設計 i) 開粒度アスファルト混合物は、骨材が粗いため、荷重支持機構はアスファルト粘着力よりもむしろ骨材のかみ合わせに依存する面が強い。このような混合物ではマーシャル安定度試験により最適アスファルト量を選定するのは好ましくないとされていたため、室内配合はこれまで実績等により決定していたが、「舗装施工便覧(平成18 年度版)」に規定されている方法をとってもよい。 ii) 開粒度アスファルト混合物は、マーシャル試験により、空隙率等を確認する必要がある。なお、アスファルト量が多いと施工時に分離を起こしたり、下部にアスファルトが溜まるなどの現象が生じたりすることがあり、浸透用セメントミルクが十分に浸透しないことがあるので、アスファルト量の設定に際しては十分検討する必要がある。</p>	<p>最適アスファルト量の設定を舗装施工便覧（平成 18 年版）によることとする</p>

対象項目	現行要領	改訂案	備考
第3章 管理及び 検査 3.4.2 混合物の 室内配合	<p>図-解3.6 ポーラスアスファルト混合物の配合設計の手順</p> <p>3) その他の混合物の配合設計 前述の2種類(ポーラスアスファルト混合物と開粒度アスファルト混合物)を除くアスファルト混合物の配合設計は、以下の手順で行う。) 配合設計は、「舗装施工便覧(平成18年版)」により行う。) 最適アスファルト量を設定した後、混合物の物性試験を実施する。その結果、基準値を満足する場合は、このアスファルト量を設計アスファルト量とする。これらの基準値を満足しない場合は、材料の選定からやり直す。なお、再生密粒度アスファルト混合物については、耐はく離抵抗性のばらつきのある材料であることを考慮して、工事前に、現場で使用する材料を用いて水浸ホイルトラッキング試験(40)を行い、はく離率5%以下であることを確認しておく必要がある。</p>	<p>図-解3.6 ポーラスアスファルト混合物の配合設計手順</p> <p>3) その他の混合物の配合設計 前述の2種類(ポーラスアスファルト混合物と開粒度アスファルト混合物)を除くアスファルト混合物の配合設計は、以下の手順で行う。 i) 配合設計は、「舗装施工便覧(平成18年版)」による。 ii) 最適アスファルト量を設定した後、混合物の物性試験を実施する。その結果、基準値を満足する場合は、このアスファルト量を設計アスファルト量とする。これらの基準を満足しない場合は、材料の選定からやり直す。 なお、再生密粒度アスファルト混合物については、耐はく離抵抗性のばらつきのある材料であることを考慮して、工事前に、現場で使用する材料を用いて水浸ホイルトラッキング試験(40)を行い、はく離率5%以下であることを確認しておく必要がある。</p>	

対象項目	現行要領	改訂案	備考																								
第3章 3.8 常温混合物		<p>3.8 常温混合物</p> <p>(1) 緊急補修に用いる常温混合物の規格値は、表 - 3.30 のとおりとする。</p> <p style="text-align: center;">表 - 3.30 常温混合物の規格値</p> <table border="1" data-bbox="1478 254 2475 541"> <thead> <tr> <th>要求性能</th> <th>試験名</th> <th>評価値</th> <th>規格値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>初期の安定性</td> <td>常温ホイールトラッキング試験(20) [20 ,15分養生]</td> <td>舗装調査・試験法便覧B003「ホイールトラッキング試験方法」</td> <td>20mm沈下時の走行回数</td> </tr> <tr> <td>供用時の耐久性</td> <td>カンタブロ試験(5) [5 ,1日養生]</td> <td>舗装調査・試験法便覧B010「カンタブロ試験方法」</td> <td>損失率(%)</td> </tr> <tr> <td>降雨時の耐久性</td> <td>一軸圧縮試験(20) [60 ,7日養生]</td> <td>1) 舗装調査・試験法便覧D001T「補修用常温混合物の一軸圧縮試験方法 解説3」</td> <td>残留歪率</td> </tr> <tr> <td></td> <td>簡易ポットホール走行試験(20) [20 ,15分養生]</td> <td>解説参照</td> <td>8mm沈下時の走行回数(回)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>100以上</td> </tr> </tbody> </table> <p>【解説】</p> <p>(1) 緊急補修に用いる常温混合物については、従来天候などで材料を使い分けていたが、初期の安定性、供用時の耐久性、降雨時の耐久性に着目し天候に左右されることなく耐久性を発揮できるための要求性能を定めた。この規格値については、より良い材料の存在が確認できれば、その都度見直していくものである。</p> <p>簡易ポットホール走行試験については、20 15 分養生した後、以下の手順で実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) W T 試験供試体の中央部分にポットホールを作製する。ポットホールの大きさは、当初、首都高の緊急補修箇所の実態を踏まえた 150 mm×40 mm(10 cm厚W T 試験供試体を使用)を採用する。 2) 写真-解 3.1 に示すとおり水を溜めたポットホールに材料を詰め、ローラーコンパクタにより転圧する。 <div data-bbox="1673 1167 2309 1419" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">写真 - 解 3.1 簡易ポットホールの供試体作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 3) 試験機に供試体をセットし、20 で 15 分間養生した後、舗装調査・試験法便覧 B003「ホイールトラッキング試験方法」に基づき、20 で試験を実施する。 	要求性能	試験名	評価値	規格値	初期の安定性	常温ホイールトラッキング試験(20) [20 ,15分養生]	舗装調査・試験法便覧B003「ホイールトラッキング試験方法」	20mm沈下時の走行回数	供用時の耐久性	カンタブロ試験(5) [5 ,1日養生]	舗装調査・試験法便覧B010「カンタブロ試験方法」	損失率(%)	降雨時の耐久性	一軸圧縮試験(20) [60 ,7日養生]	1) 舗装調査・試験法便覧D001T「補修用常温混合物の一軸圧縮試験方法 解説3」	残留歪率		簡易ポットホール走行試験(20) [20 ,15分養生]	解説参照	8mm沈下時の走行回数(回)				100以上	常温合材に関する規格値を規定した
要求性能	試験名	評価値	規格値																								
初期の安定性	常温ホイールトラッキング試験(20) [20 ,15分養生]	舗装調査・試験法便覧B003「ホイールトラッキング試験方法」	20mm沈下時の走行回数																								
供用時の耐久性	カンタブロ試験(5) [5 ,1日養生]	舗装調査・試験法便覧B010「カンタブロ試験方法」	損失率(%)																								
降雨時の耐久性	一軸圧縮試験(20) [60 ,7日養生]	1) 舗装調査・試験法便覧D001T「補修用常温混合物の一軸圧縮試験方法 解説3」	残留歪率																								
	簡易ポットホール走行試験(20) [20 ,15分養生]	解説参照	8mm沈下時の走行回数(回)																								
			100以上																								

	現行要領	改訂案			
<p>第4章 施工</p> <p>4.1.2.6 混合物 の運搬</p>	<p>4.1.2.6 混合物の運搬</p> <p>(1) 混合物の運搬は、よく清掃した運搬車を用い、品質が変化しないよう注意して行わなければならない。トラックの荷台内面には、混合物の付着を防止する油等を薄く塗布するのがよい。</p> <p>(2) 混合物運搬中は、シートまたは他の方法により混合物表面を覆い、温度低下を抑制しなければならない。</p> <p>(3) 運搬距離は混合物の温度が十分保てる範囲とする。また、現場での待ち時間が長くなることは避けなければならない。</p> <p>(4) 混合物の受け渡しについては、運搬車1台ごとに混合物納品書を提出するものとする。</p> <p>【解説】</p> <p>(1) トラックの荷台内面に塗布する油は、アスファルトをカットバックするので、その使用量、塗布状況には十分注意しなければならない。</p> <p>(2) 運搬時の温度低下については、十分に注意しなければならない。特に、ポラスアスファルト混合物は空隙率が高く、通常の加熱アスファルト混合物より温度低下しやすい。したがって、運搬車に積み込んだ混合物を2重シートなどで保護し、温度低下を防ぐ必要がある。また、寒冷期や夜間工事で混合物温度の低下が懸念される場合は、舗設現場との連絡を密に行い、保温対策を十分に講じなければならない。3重シートで混合物表面を覆い温度低下を防いだ例もある。</p> <p>(3) 混合物の温度低下などによる性状変化を避けるため、長時間にわたる運搬や現場での待機には注意しなければならない。したがって、運搬に先立って舗設現場の位置、施工条件、施工能力などについて、十分な検討と打ち合わせを行う必要がある。</p> <p>(4) 混合物の温度は施工上重要な意味を持ち、温度の低下が大きいとフィニッシャによる敷均しが困難となるばかりでなく、転圧も不良となる。したがって、混合物納品書には、必ず混合物の発送時および到着時の温度を記入させなければならない。その他の留意事項は、「舗装施工便覧」による。</p>	<p>4.1.2.6 混合物の運搬</p> <p><u>(1) 混合物の運搬は、よく清掃した運搬車を用い、品質が変化しないよう注意して行わなければならない。トラックの荷台内面には、混合物の付着を防止する付着防止剤(表-4.1を満足するもの)を使用し、軽油は使用してはならない。</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">表-4.1</p> <table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">圧裂強度残留率(%)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">70以上</td> </tr> </table> </div> $\text{圧裂強度残留率(\%)} = \frac{\text{付着防止剤等に浸漬した供試体の圧裂強度 (N/mm}^2\text{)}}{\text{塗布なしの圧裂強度 (N/mm}^2\text{)}} \times 100$ <p>圧裂強度は舗装調査・試験法便覧 B006 により確認し試験条件は、非水浸で養生時間 20 24 時間、試験温度は 20 とする。試験はポラスアスファルト混合物(13)で実施する。</p> <p>(2) 混合物運搬中は、シートまたは他の方法により混合物表面を覆い、温度低下を抑制しなければならない。</p> <p>(3) 運搬距離は混合物の温度が十分保てる範囲とする。また、現場での待ち時間が長くなることは避けなければならない。</p> <p>(4) 混合物の受け渡しについては、運搬車1台ごとに混合物納品書を提出するものとする。</p> <p>【解説】</p> <p><u>(1) 混合物の運搬の際、トラックの荷台内面に付着防止剤を塗布し、軽油などは使用してはならないこととした。これは、既往の研究¹⁾より軽油を使用することにより、ダンプの荷台に軽油が溜まり(写真-解4.1)その軽油がアスファルト混合物の強度を弱くし、アスファルト混合物の破損の原因となることが指摘されているためである。また、室内試験結果によると軽油の使用によりアスファルト混合物の強度が著しく低下することがわかった。よって軽油を使用してはならないこととした。</u></p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">写真-解4.1 ダンプに溜まった軽油</p> <p><u>また、室内試験の表-4.1 圧裂強度を確認する供試体の作成方法は以下の手順により実施すること。</u></p>	圧裂強度残留率(%)	70以上	<p>混合物の運搬の際は軽油の使用を禁止し、付着防止剤を使用することとした。</p> <p>付着防止剤の規格値を定めた。</p>
圧裂強度残留率(%)					
70以上					

第4章
施工

4.1.2.6
混合物
の運搬

手順1) 容器に0.7kg/m²の軽油または付着防止剤を塗布し(写真-解4.2)、その上にポラスアスファルト混合物(13)を約10kg入れる(写真-解4.3)。



写真-解4.2 容器への付着防止剤等の塗布 写真-解4.3 混合物の容器への移動

手順2) 防火用のシートでバットを覆い、ポラスアスファルト混合物(13)で165、密粒度アスコン(13)で175の恒温槽に60分間静置する(写真-解4.4)。養生終了後、容器に入れた混合物のうち、マーシャル供試体を3個作製するために必要な4kg分の混合物を残し、上部の混合物6kgを除去する(写真-解4.5)。



写真-解4.4 防火用シートで覆い静置 写真-解4.5 静置後に上部混合物を6kg除去

3) 容器に残った下部の4kgの混合物と軽油または付着防止剤を十分に混合する(写真-解4.6)。混合後、それぞれ3個のマーシャル供試体を作製する(写真-解4.7)。マーシャル供試体は室内で放冷した後、脱型して密度を測定する。



写真-解4.6 付着防止剤等との混合 写真-解4.7 マーシャル供試体作製

参考文献1) 峰岸: 低騒音舗装の油によるポットホールの原因究明と抑制対策委の検討, 土木学会舗装工学論文集 第8巻, 2003年12月

	現行要領	改訂案	
<p>第4章 施工</p> <p>4.1.2.6 混合物 の運搬</p>		<p>(2) 運搬時の温度低下については、十分に注意しなければならない。特に、ポーラスアスファルト混合物は空隙率が高く、通常の加熱アスファルト混合物より温度低下しやすい。したがって、運搬車に積み込んだ混合物を2重シートなどで保護し、温度低下を防ぐ必要がある。また、寒冷期や夜間工事で混合物温度の低下が懸念される場合は、舗設現場との連絡を密に行い、保温対策を十分に講じなければならない。3重シートで混合物表面を覆い温度低下を防いだ例もある。</p> <p>(3) 混合物の温度低下などによる性状変化を避けるため、長時間にわたる運搬や現場での待機には注意しなければならない。したがって、運搬に先立って舗設現場の位置、施工条件、施工能力などについて、十分な検討と打ち合わせを行う必要がある。</p> <p>(4) 混合物の温度は施工上重要な意味を持ち、温度の低下が大きいとフィニッシュによる敷均しが困難となるばかりでなく、転圧も不良となる。したがって、混合物納品書には、必ず混合物の発送時および到着時の温度を記入させなければならない。その他の留意事項は、「舗装施工便覧」による。</p>	<p>舗設の際は軽油の使用を禁止し、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6の規格値を満足する材料を使用することとした。</p> <p>表-4.1の追加に伴い、表番号を修正した。</p>

	現行要領	改訂案													
第4章 施工	4.1.2.7 舗設	4.1.2.7 舗設													
4.1.2.7 舗設	<p>(a) 舗設機械</p> <p>(1) ポーラスアスファルト舗装に用いる舗設機械には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるものがあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>【解説】</p> <p>(1) 舗設機械の標準的な編成などは「舗装施工便覧」による。</p>	<p>(a) 舗設機械および資機材</p> <p>(1) ポーラスアスファルト舗装に用いる舗設機械には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるものがあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>(2) <u>舗設機械および振動コンパクタ、タンパー等の工具に軽油を塗ってアスファルト混合物を取り扱ってはならない。付着防止剤を使用する場合は、4.1.2.6(1)に規格値を満足する材料を使用すること。</u></p> <p>【解説】</p> <p>(1) 舗設機械の標準的な編成などは「舗装施工便覧」による。</p> <p>(2) <u>舗設機械および資機材については4.1.2.6混合物の運搬と同様に、軽油は使用してはならないこととした。また、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6(1)を満足する材料を使用することとする。</u></p>	舗設の際は軽油の使用を禁止し、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6の規格値を満足する材料を使用することとした。												
4.1.3.8 舗設	<p>4.1.3.8 舗設</p> <p>(a) 舗設機械</p> <p>(1) ポーラスアスファルト舗装への打換え工事に用いる舗設機械等には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるものがあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>【解説】</p> <p>(1) ポーラスアスファルト混合物を用いる高機能舗装への打換え工事における標準的な舗設機械等の編成例は「舗装施工便覧」等を参考にされたい。</p>	<p>4.1.3.8 舗設</p> <p>(a) 舗設機械</p> <p>(1) ポーラスアスファルト舗装への打換え工事に用いる舗設機械等には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるものがあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>(2) <u>舗設機械および振動コンパクタ、タンパー等の工具に軽油を塗ってアスファルト混合物を取り扱ってはならない。付着防止剤を使用する場合は、4.1.2.6(1)に規格値を満足する材料を使用すること。</u></p> <p>【解説】</p> <p>(1) ポーラスアスファルト混合物を用いる高機能舗装への打換え工事における標準的な舗設機械等の編成例は「舗装施工便覧」等を参考にされたい。</p> <p>(2) <u>舗設機械および資機材については4.1.2.6混合物の運搬と同様に、軽油は使用してはならないこととした。また、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6(1)を満足する材料を使用することとする。</u></p>	表-4.1の追加に伴い、表番号を修正した。												
4.2.2.5 混合物の製造	<p>4.2.2.5 混合物の製造</p> <p>(1) ポーラスアスファルト混合物の製造は、「4.1.2.5アスファルト混合物の製造」に準ずるものとする。</p> <p>(2) グースアスファルト混合物のプラントにおける混合時の温度は、次の範囲を標準とする。</p> <p style="text-align: center;">表-4.1 混合時の標準温度範囲</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>材 料</td> <td>フィラー</td> <td>アスファルト</td> </tr> <tr> <td>温 度</td> <td>常温～150℃</td> <td>220℃以下</td> </tr> </table>	材 料	フィラー	アスファルト	温 度	常温～150℃	220℃以下	<p>4.2.2.5 混合物の製造</p> <p>(1) ポーラスアスファルト混合物の製造は、「4.1.2.5アスファルト混合物の製造」に準ずるものとする。</p> <p>(2) グースアスファルト混合物のプラントにおける混合時の温度は、次の範囲を標準とする。</p> <p style="text-align: center;">表-4.2 混合時の標準温度範囲</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>材 料</td> <td>フィラー</td> <td>アスファルト</td> </tr> <tr> <td>温 度</td> <td>常温～150℃</td> <td>220℃以下</td> </tr> </table>	材 料	フィラー	アスファルト	温 度	常温～150℃	220℃以下	
材 料	フィラー	アスファルト													
温 度	常温～150℃	220℃以下													
材 料	フィラー	アスファルト													
温 度	常温～150℃	220℃以下													

	現行要領	改訂案	
第4章 施工			
4.2.2.7 舗設	<p>4.2.2.7 舗設</p> <p>(a)舗設機械</p> <p>(1)舗設機械には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>【解説】</p> <p>(1)グースアスファルト混合物の敷均しには、グースアスファルト専用フィニッシャを使用する。ただし、舗装幅員の関係その他で機械施工のできない箇所は人力によって施工する。この場合、入念かつ速やかに施工しなければならない。 詳細は「舗装施工便覧」による。</p>	<p>4.2.2.7 舗設</p> <p>(a)舗設機械</p> <p>(1)舗設機械には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。 <u>(2)舗設機械および振動コンパクタ、タンパー等の工具に軽油を塗ってアスファルト混合物を取り扱ってはならない。付着防止剤を使用する場合は、4.1.2.6(1)に規格値を満足する材料を使用すること。</u></p> <p>【解説】</p> <p>(1)グースアスファルト混合物の敷均しには、グースアスファルト専用フィニッシャを使用する。ただし、舗装幅員の関係その他で機械施工のできない箇所は人力によって施工する。この場合、入念かつ速やかに施工しなければならない。 詳細は「舗装施工便覧」による。</p> <p><u>(2)舗設機械および資機材については4.1.2.6 混合物の運搬と同様に、軽油は使用してはならないこととした。また、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6(1)を満足する材料を使用することとする。</u></p>	舗設の際は軽油の使用を禁止し、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6の規格値を満足する材料を使用することとした。
4.2.3.8 舗設	<p>4.2.3.8 舗設</p> <p>(a)舗設機械</p> <p>(1)打換え工事に用いる舗設機械等には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。</p> <p>【解説】</p> <p>(1)舗設機械等は、「舗装施工便覧」に準ずるものとする。</p>	<p>4.2.3.8 舗設</p> <p>(a)舗設機械</p> <p>(1)打換え工事に用いる舗設機械等には、機能、性能および形式などが異なる様々な仕様のあるので、使用目的や施工条件にあった機種を選定しなければならない。 <u>(2)舗設機械および振動コンパクタ、タンパー等の工具に軽油を塗ってアスファルト混合物を取り扱ってはならない。付着防止剤を使用する場合は、4.1.2.6(1)に規格値を満足する材料を使用すること。</u></p> <p>【解説】</p> <p>(1)舗設機械等は、「舗装施工便覧」に準ずるものとする。</p> <p><u>(2)舗設機械および資機材については4.1.2.6 混合物の運搬と同様に、軽油は使用してはならないこととした。また、付着防止剤を使用する場合は4.1.2.6(1)を満足する材料を使用することとする。</u></p>	

	現行要領	改訂案	
4.6 部分補修 4.6.1 緊急補修	<p>4.6.部分補修</p> <p>4.6.1 緊急補修</p> <p>(1) 緊急補修</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(1) 常温混合物による孔埋を行う前に、損傷付近の劣化したアスファルト混合物、水分や塵などを取り除く。</p> <p>(2) 孔埋用の常温混合物は、損傷付近の舗装種類にあったものを用いる。</p> </div> <p>【解説】</p> <p>(1) 常温混合物は、一般の加熱アスファルト混合物と比べ、施工が簡便な反面、耐久性が低い傾向にある。少しでも付着力を向上させるため、施工前に清掃を行ってゴミ等を取り除いておく。耐水性を高め、雨天時にも付着力を確保できるようにしたという製品もあるが、このような製品であっても、水分が少ないほうが良好な付着が期待できるため、可能な限り水分除去を行うようにする。</p> <p>(2) 首都高速では、現在、高機能舗装への打替えを進めているが、現時点では、粗粒度ギャップアスファルト混合物をはじめとして、さまざまな舗装が残存している。常温混合物には、粗粒度ギャップアスファルト混合物用やポーラスアスファルト混合物用など、さまざまなものがあるため、損傷部の既設舗装の種類に合わせて、使い分けことが望ましい。</p> <p>なお、これらの常温混合物の品質管理については、各材料の製造業者の推奨を参考にして定めると良い。常温混合物は、適切な環境のもとで保管するようにし、使用期限を越えたものは使用してはならない。</p>	<p>4.6 部分補修</p> <p>4.6.1 緊急補修</p> <p>(1) 緊急補修</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(1) 常温混合物による孔埋を行う前に、損傷付近の劣化したアスファルト混合物、水分や塵などを取り除く。</p> <p>(2) 孔埋用の常温混合物は、<u>3.8の規格値を満足する常温混合物を使用すること。</u></p> </div> <p>【解説】</p> <p>(1) 常温混合物は、一般の加熱アスファルト混合物と比べ、施工が簡便な反面、耐久性が低い傾向にある。少しでも付着力を向上させるため、施工前に清掃を行ってゴミ等を取り除いておく。耐水性を高め、雨天時にも付着力を確保できるようにしたという製品もあるが、このような製品であっても、水分が少ないほうが良好な付着が期待できるため、可能な限り水分除去を行うようにする。</p> <p>(2) <u>常温混合物は、3.8に規定する常温混合物を使用することとする。</u></p> <p>なお、これらの常温混合物の品質管理については、各材料の製造業者の推奨を参考にして定めるとよい。常温混合物は、適切な環境のもとで保管するようにし、使用期限を越えたものは使用してはならない。</p>	<p>常温混合物は3.8に規定する規格値を満足するものを使用することとした。</p>